コスタリカ現地レポート 2

佐原 良祐*

2-1 マヌエル・アントニオ国立公園

前回の活動レポートでも簡単に説明したが，ここでもう一度私が派遣されているマヌエル・アントニオ国立公園を紹介したい．コスタリカは豊かな自然・動植物を目玉とした，エコツーリズムが盛んである．その中でも首都サンホセから比較的近く (バスで約 3~4 時間ほど)，多くの野生動物が簡単に観察できることから，マヌエル・アントニオ国立公園は欧米の観光客を中心に多くの人が訪れている．良く観察される主な動物はノドジロオマキザル，ホエザル，リスザル，ナマケモノ，アグーチ，イグアナであり，コスタリカ国内に生息している 4 種類の猿のうち，3 種類の猿が肉眼で簡単に観察できる (図 2-1).

図 2-1 マヌエル・アントニオ国立公園内で観察できる主な動物．(A) ノドジロオマキザル．(B) ホエザル．(C) リスザル．(D) ナマケモノ．(E) アグーチ．(F) イグアナ．

*独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊
E-mail: takakuraken.takakuraken@gmail.com

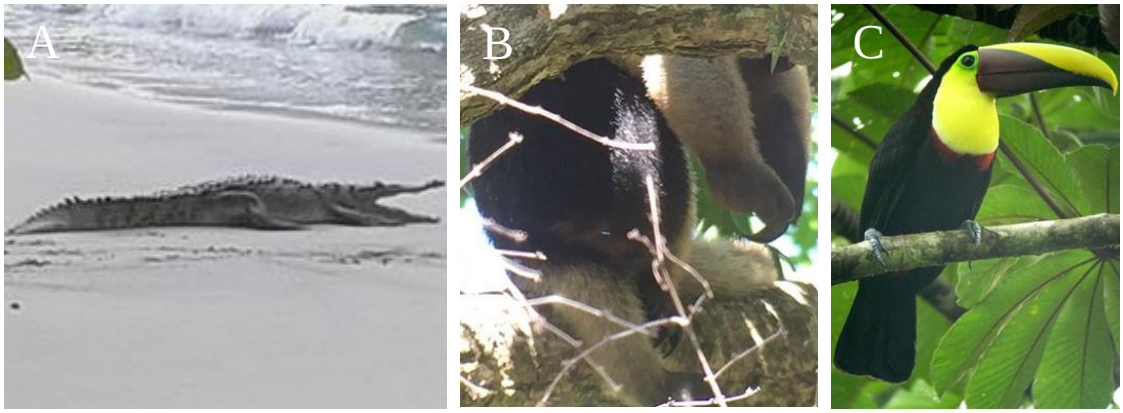

図 2-2　マヌエル・アントニオ国立公園内で時々観察できる主な動物．(A) ワニ．(B) アリクイ．(C) トゥカン (撮影：A ：Cordero Castellón Rolaman，B, C：Herrera Retana Javier).

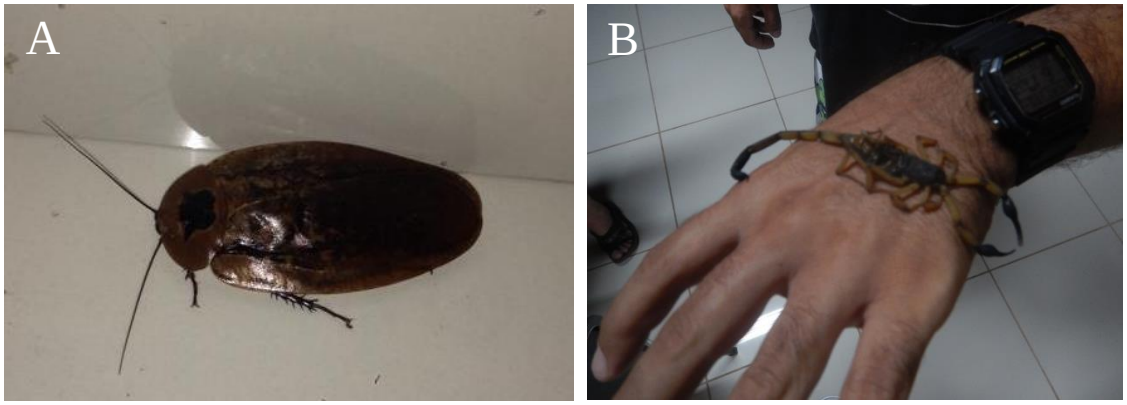

図 2-3　職員寮に住みついている生き物．他にもネズミやコウモリ，タランチュラ，ヤモリが現れる．(A) ゴキブリ．(B) サソリ．

他には，日本では外来種として問題になっているアライグマもとても多い．アライグマの見た目は可愛いが気性が荒く，国立公園に来た観光客の荷物を荒らし，さらに近づくと噛みつくことが多い．ここコスタリカでは，元々生息していた在来種ではあるものの，ちょっとしたトラブルメーカーになっている．そして時々，普段公園内の沼に生息している大きなワニが，突如ビーチに出没し海水浴を楽しむ事もあり，また巨大な嘴のトゥカンやアリクイにも運が良ければ出会えることもある (図 2-2)．筆者が暮らすマヌエル・アントニオ国立公園内にある職員寮にも，手のひらほどの大きさにもなるゴキブリや，毒を持ったサソリ等，多くの生き物が現れる (図 2-3).

興味深い動物が数多く生息していて，公園内のビーチもとても美しいので，外国人のマヌエル・アントニオ国立公園の入場料は 16 ドル (日本円で約 1900 円) と高めだが (コスタリカ人は1600 コロン，日本円で約320円)，多い時には欧米の外国人の観光客を中心にして，一日に 3000 人以上の観光客が押し寄せる事もある (図 2-4).

図 2-4　3000 人以上の来場者数を記録した日のビーチ (撮影:Herrera Retana Javier).

図 2-5　国立公園に生息しているイモガイ.

図 2-6　ラテン的な職員.

これほどまでに多くの観光客が訪れているマヌエル・アントニオ国立公園ではあるが，海洋生物相の調査は少なく，どんな生物がどこに住んでいるかさえ分かっていない．実際にカメラで撮影した毒を持つイモガイを，マヌエル・アントニオ国立公園に長年勤務する職員 (自然保護官) に尋ねた際に，「毒を持っていなく安全だ」と答えてくれたが，後で同定してみるとそれは間違っていた (図 2-5)．国立公園を管理する職員の立場からしても，生息している危険生物を把握していく事は大切だと思うが，楽観的な国民性の影響か職員に後日指摘し，説明してもあまり気にしていない様子だった (図 2-6).

また「時々，海にカイマンという小型のワニが現れるけど小さいので人間には危害を加えない」と職員から聞いていたのだが，ある日公園内のビーチに行ったら 3 メートルを超えるであろう，カイマンとは別種の巨大なワニが海を泳いでいてかなり驚いた経験がある．他の職員に確認したら人間も襲われることもよくあるので，大型のワニはかなり危険らしい．この事があってからは，安全に関わる事は絶対に複数の職員に確認してから行動する

ようにしている.

聞くところによるとコスタリカに限らずラテンアメリカは，他人から尋ねられ際にはっきり ”知らない” と答える事をあまり好まず，たとえ分からなくても適当に答えるのがマナー?? になっているらしい．他にもバス停の場所を訪ねたときやわからない事を現地の人に尋ね，後で確認したら間違っていたという事がとても多い.

2-2 生態調査

マヌエル・アントニオ国立公園は，どんな生物が生息しているかさえ分かっていないため，私は主に海洋生物相の生態調査を行っている． マヌエル・アントニオ国立公園のみならず，コスタリカの国立公園は原則生物採集禁止であるが，国立公園を管理しているSINAC (国家保全地域庁) に特別に許可を得て，魚類・貝類を採集している． その後，調査関係の機材・設備は公園内にはまったくないので，首都サンホセにあるコスタリカ大学動物学博物館に採集した個体を運んで標本を作成している． また魚類は標本作成のみならず水中写真を撮影し，神奈川県立生命の星・地球博物館に，同定・登録をお願いしている (図 2-7).

この国立公園における生物採集許可だが，管理しているSINACの規則は厳しく，色々な制約の中で採集を行っている． さらに担当してくれる職員にもよるが，許可が下りるのにかなり時間がかかる事がある． 私の場合，職員に何度も説明し催促したが許可が下りるのに，結局半年ほどかかった． 今お世話になっている博物館の学生も，私以上に時間がかかり，温厚な学生なのに珍しく憤慨していた.

図 2-7　シュノーケリングで水中撮影をしている様子 (撮影：池田 枝里).

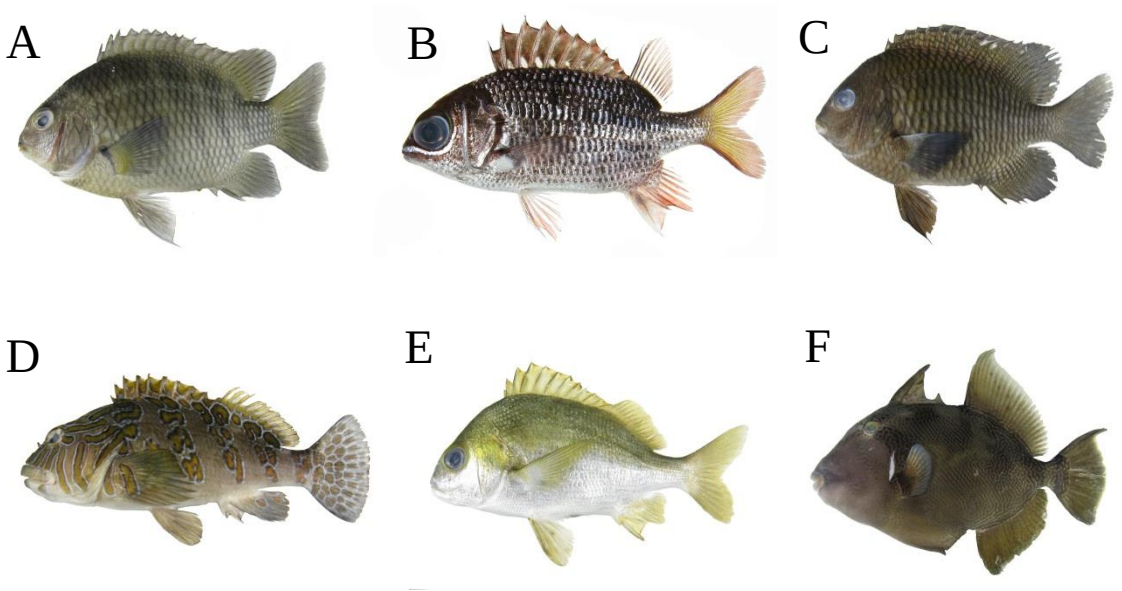

図 2-8　マヌエル・アントニオ国立公園で採集し，実際に作成した魚類標本の例．(A) *Abudefduf concolor*．(B) *Neoniphon suborbitali*．(C) *Stegastes acapulcoensis*．(D) *Cirrhitus rivulatus*．(E) *Anisotremus caesius*．(F) *Pseudobalistes naufragium*.

私は，学生の頃に調査のために標本を作製したことはあったが，同定のみを目的としていたため簡易的なものだった．そのため，調査に協力していただいている研究者の方達に教えていただき，さらに日本から標本作成の本を取り寄せて，四苦八苦しながら現在標本作成をしている．手先が不器用な筆者ではあるが，この標本作成の作業が地味ではあるが，面白く楽しみな活動のひとつになっている (図 2-8).

前回のレポートでも紹介したように，生物多様性のホットスポットで注目されているコスタリカであるが，陸上生物に比べ海洋生物の調査が少ない．標本に基づいた魚類・貝類の分類を専門にしている研究者が非常に少ないために，コスタリカ国内の分類学的な情報がきちんと整理されていない．現地の貝類を専門とする学芸員の方に，勧められて買った図鑑『Sea Shells of Tropical West America (second edition)』(Keen, 1971) も 44 年も前の本で，貝の写真が基本的に白黒であり，たまにピントがずれているのもある．貝類のみならず，他の分類群の図鑑も見ると，生物がカラー写真ではなく，白黒の写真や絵の場合が多い．このような状況のため，コスタリカ国内は多くの未記載種 (新種として発表されていない種のこと) がいると考えられている．実際に，コスタリカのカララ国立公園に 2013 年度まで活動していた，元青年海外協力隊の村瀬敦宣氏 (現宮崎大学農学部) は，活動先の公園近くの海でスズメダイ科の新種を発見した (図 2-9)．私も活動が進むにつれ，いずれ未記載種を発見できる日が来るのではないのかと期待しながら，調査に励んでいる．

図 2-9 首都サンホセで行われた Congreso Costarricense y IV Simposio Latinoamericano de Ictiología にて，スズメダイ科の未記載種について発表する村瀬敦宣氏.

2-3 旅行 (トルトゥゲーロ国立公園)

先日，活動が休みの際に，旅行でカリブ海に面しているトルトゥゲーロ国立公園に行ってきた．首都サンホセから，バスで 4~5 時間ほどで川の下流に着き，その後小型のボートでカリブ海と運河に挟まれた，トルトゥゲーロ村に向かった．トルトゥゲーロは「カメのいる場所」という意味らしく，7~9 月の夜の海岸には，多くのアオウミガメが産卵しにくる．私は友人と，ウミガメ産卵を見るツアーに参加した．保全のためカメラ撮影は禁止されているので，アオウミガメの写真はないが，人生で初めて産卵シーンを間近で見ることができ，とても感動した．ツアーを終えた後は，地元のガイドの方に，一日中トルトゥゲーロ国立公園内や，運河近くのジャングルの案内をしていただいた．ガイドの人の驚異的な観察眼で，多くの生き物に出会えた．蒸し暑いジャングルの中には，有名なガイドブックの『Lonely Planet Costa Rica』の表紙にもなっているアカメアマガエルや，他にもヤマアラシ，クモザル，ホエザル，ノドジロオマキザル，ナマケモノ等がのんびりと暮らしていてじっくりと観察する事ができた (図 2-10).

マヌエル・アントニオ国立公園でも行われているが，トルトゥゲーロ国立公園では，観光客や地元の学生に対し，公園を案内するガイドやボランティア，国立公園に勤務する職員により環境教育が行われていた．そのためか，地元の人々の環境問題に関する意識は高いように感じられ，コスタリカが，環境先進国と言われる基礎をこの環境教育が担っているように思われた．しかしコスタリカは，下水やゴミの処理施設が不十分らしく，自然が豊かな様に見えて汚水が垂れ流しのため川が汚れて泡立っている所もあり，リサイクルするために市民がきちんとゴミを分別しても，結局全て埋め立てしてしまうことも多いそうだ．今後の国づくりにおいて，環境教育というソフト面のみならず，施設整備などのハード面での取組みが必要ではないのかなと考えさせられた.

図 2-10 トルトゥゲーロで観察できた動物．(A) アカメアマガエル．(B) ヤマアラシ (撮影：高坂 知樹).

2-4 エピローグ

コスタリカは様々な多くの野生生物種が生息し，生物多様性の高さから着目されているが，性の多様性についても寛容で日本に比べ非常にオープンである．街の中で，男性同士で手をつないでいたりキスをしたりする光景には，次第に見慣れてきた．しかし，マヌエル・アントニオ国立公園のビーチで歩いていると，時々同性愛者の方からナンパされるのは未だに慣れない．聞くと，私が動きやすいのでビーチでは競泳用水着を着ているためだそうだ．意味は良くわからなかったが，人生初のモテ期がここコスタリカで到来している．男性のみからだけだが…

こういったオープンなラテン気質以外にも，全てが日本と違うコスタリカに来てすでに一年も経ってしまった．最初は，時間・約束事の全てにおいてルーズなコスタリカ人の Pura vida に戸惑う事も多かったが，最近はある意味全てが遠回りになってしまうこのゆっくりとした時間を，楽しめるようになってきた．この，のんびりとした生活に慣れてしまった後に日本社会に適応できるようになれるかがいささか不安ではあるが，これからも日本との色々な違いを理解し，楽しんで精一杯活動していきたい．

引用文献

Keen, A. M. (1971). Sea shells of tropical west America: marine mollusks from Baja California to Peru. Stanford University Press.